

去る9月、ICOM(国際博物館大会)が京都で7日間にわたって開催されました。70年以上にわたるICOMの歴史の中で、今回、初めての日本での開催であり、参加者数は4590人と過去最高だったそうです。日本のミュージアム関係の皆様のご協力によって実を結んだ大会でした。

全国各地ミュージアム活性化協議会も、国際委員会の一つであるICR(地方博物館国際委員会)で、ささやかながら活動報告をさせていただき、関心をもつて下さった皆様と交流する機会をいただきました。

大会では重要なディスカッションが同時に行われ、ほんの一部を聞くこともできました。なかには、紛争や民族文化の危機など、日本で呑気に生きる私たちには考えられないほど厳しい社会の中で、ミュージアムでの活動が政治や社会と深く関わっており、模索し奮闘する現場からの報告もありました。

地域ミュージアムは、その地域に生きる人たちや関わる人たちに対して、大きくても小さくても担う役割があることを、改めて考える機会でもありました。



目次：1…対談「地域文化のつくり手から」水野 正文 氏 / 12…対談「地域文化のつくり手から」石井 節夫 氏

地域ミュージアム

Fountains of Wisdom

全国各地ミュージアム活性化協議会機関紙 vol.6

発行 全国各地ミュージアム活性化協議会

〒690-0824 島根県松江市菅田町180番地 アイウォーク菅田ビル3F

TEL.0852-55-8450

「地域ミュージアム」(第6号) 2019年12月発行



「古今伝授の里」 づくり

「古今伝授の里」を基本にした 交流、観光、産業活動

古今伝授の里は、歳時記に合わせて「ゆきばた椿まつり」や「歌となる言葉とかたち展」など多彩な事業を展開している。こうした催しに合わせて交流人口が増え始めた。これに拍車をかけたのが道の駅「古今伝授の里やまと」のオープンであった。それまで大和町への入込は数万人だったが、道の駅開業後は年間70万人を集客するようになった。道の駅に隣接する農産物販売施設は昭和60年初頭に年間売上数十万円でスタートしたが、平成26年には1億4000万円を売り上げるまでに成長した。

フィールドミュージアムのサービス部門とともに、これらを運営するのが第3セクター・郡上大和総合開発(株)で、約80人の従業員が働いている。こうした動きは町のイメージを高め、移住にも効果を上げている。そして移住したい人々がこれまでになかった新しい産業を生み出すようになってきた。

文化が人をつくり、 交流が経済を支える

古今伝授の里づくりは、「歴史や文化に親しみ、わが町を誇りに思える住民Ⅱ大和町づくり」と定義した。そこには「肯定的に喜びをもって居住することが幸福につながる」という強い思いがある。

住民が文化活動に多くかかわることで交流の質が高まり、来訪者も高付加価値のものを求める比重が増す。大和町では、農業振興と合わせて、交流によって経済的なインフラを築いていくという戦略を進めている。

「古今伝授の里」づくり

古今伝授の祖・東氏

中世、郡上の領主であった東氏は代々和歌の名門で、とりわけ第9代・常縁は『古今和歌集』に関する秘伝を授受する「古今伝授」を確立した人物といわれている。

昭和54年、篠脇城のふもとで東氏の居館跡が発見された。そこに現れた庭園は国の名勝指定を受け、一躍脚光を浴びることになった。

さらに、東家27代当主より史資料が大和町に寄託されることになった。

「古今伝授の里」を軸に 人と産業を育てる

その頃、大和町は個性に欠け、存在感がないことに不満が募っていた。「村おこし」ブームのなかで商工会青年部が中心となって古今伝授の祖・東常縁を顕彰する謡曲を復曲して「薪能くるす桜」を開催した。

行政では、「古今伝授の里」づくりを軸に産業振興と人材育成を図ることになった。その翌年、20代、30代の若者を中心とする塾が始まった。

「古今伝授の里」づくりへ向けて、町民の活動と行政の事業がスタートした。

「古今伝授の里」づくり

「古今伝授」の中心地は、中世・東氏の本拠地に設定された。国の名勝・東氏館跡庭園は古今植物園となった。歴史民俗資料館はリフォームした東氏記念館とインフォメーションセンターに。そして和歌文学館や篠脇山荘を新設した。また、サービス施設としてレストラン、売店、茶屋を設けた。これらで構成されるミュージアムが平成5年に開園した。

「古今伝授の里」から 日本文化を創造し、発信する

東氏が勧請した明建神社では、毎年神社の祭礼の日「薪能くるす桜」が上演される。また、地元取材した新作文楽「母情落日斧」を制作し、人形浄瑠璃も毎年開催するようになった。これらは和歌文学とも密接な関係を持つ日本文化を「古今伝授の里」の独自文化として昇華しようとする試みである。

こうした活動の基盤は、短歌図書館「大和文庫」や、「島津忠夫文庫」をはじめとした資料の収集や調査・研究の積み重ねである。さらに、短歌大会の開催、短歌団体や結社の受け入れ、地域の小学校や福祉施設での短歌教室など、着実に和歌文化をこの地に定着させてきた。

平成26年、フィールドミュージアムは20周年を迎えた。ここで改めて和歌や文化のまちづくりを考える委員会を立ち上げ、若手有識者や経験者などが集まった。そして第1回現代短歌フォーラムには全国から大学短歌会が結集した。

古今伝授の里フィールド ミュージアムの新たな拠点

藤原…昨日、古今伝授の里フィールドミュージアムに行ってきました。和歌文学館に。フィールドミュージアムの入口の辺りで工事中の所があった。「何かまた始まったなあ」と思っていました。

水野…郡上市が「短歌の里交流館」の建設を進めています。メインは市役所の大和庁舎にある「島津忠夫文庫」の書籍類です。島津忠夫博士という、国文学者で、旧大和町の文学顧問、のちに古今伝授の里フィールドミュージアムの文学顧問を務められた方がいらつしやいます。その方はお亡くなりになったんですが、亡くなる前に、ご自宅にあった蔵書を郡上市に一括して寄贈され、島津忠夫文庫ができました。

藤原…大和庁舎にあるんですね。

水野…3階にあります。かつての大和町の議員控室が全面的に島津忠夫文庫になっています。それを全部、フィールドミュージアムへ運ぶ計画だと聞いています。

藤原…それはいいことですね。

水野…新しい施設の中には、大和町はもちろん郡上市の文化協会の人たちなど、絵や書や写真を楽しむ人たちが作品を展示できる機能ができます。加えて、島津忠夫文庫の蔵書を活用した専

Interview



水野 正文さん (郡上大和総合開発(株) 代表取締役社長)

「古今伝授の里づくり」は、昭和50年代後半から始動し、岐阜県大和町のまちづくりとして花開いていきました。そして平成16年に市町村合併により郡上市になると、そのまちづくりは広がりを見せていきます。今回お話を伺った水野正文さんは、旧大和町、そして合併後の郡上市職員として、また第3セクターの役員として、このまちづくりを牽引してきたリーダーの一人です。

門的な研究や、地元の小中学生が夏休みや冬休みに自主勉強ができる学習室も計画されています。名称は、短歌の里交流館「よぶこどり」です。地元の特産品を紹介販売する和ショップ「よぶこどり」が、施設全体の名称になりました。

藤原..その運営は？

水野..社会教育施設なので、運営は郡上市です。ショップとカフェは目的外使用で3セクが運営します。施設全体を3セクが運営するのであれば、施設の目的や機能が変わってきます。

藤原..もつと違う形になるといことですね。

水野..郡上市では「歌のまち」づくりを進めていく拠点施設として、位置づけられています。その中で交流し、訪れて頂いた方にサービスを提供する部分を3セクが担う予定です。

振り返ると、造園家の三宅宜哉さん、建築家の瀧光夫さん、画家の西田真さん、歌人で初代名誉館長の小瀬洋喜さん、国文学者の島津忠夫さんら、当時、その世界の第一線で活躍されていた方々が、心血を注いでフィールドミュージアムの設置に携わってくださいました。小瀬さんと島津さんは開園後も、運営面で熱心にご指導いただきました。残念ながら先生方はいずれも亡くなられてしまいました。いまはそのお子さんや有縁の方々が、先生たちの思いを引き継いで、ミュージアムに関わってくださいたいです。同じように、金子さん（古今伝授の里

郡上八幡のホテル積翠園

藤原..郡上八幡のホテルはどこが運営しているのですか？

水野..奥濃飛白山観光株式会社です。昭和39年、ひるがのスキー場全盛期に、名鉄や岐阜バス、旧郡上郡7か町村を含めた白川村、高山市などが資本を負担し、株主となり設立されました。平成22年に、岐阜バスから、ホテル運営を撤退する話がありました。当時私は市の職員でした。副市長から「水野、何とかしよう」と言われ、そこで岐阜バスと譲渡について話し合いを重ねました。最終的に、地元の信用金庫が事務局を持つ「郡上地域活性化協議会」の協力を得て、建設業者46社と、商工会や森林組合、漁業組合の関係者等が出資し、経営を引き継ぎ、それ以来ずっとこの会社の取締役をしています。

藤原..その会社の？

水野..そうです、それ以来経営に関わってきました。当初は赤字が4年続きましたが、後輩の市職員の努力により5年目からは黒字になってきました。それで今回郡上市から大規模改修の話が持ち上がりました。ただ、資金づくりが必要で、各方面に働きかけ、郡上市、(株)ハイウェイिकास、郡上八幡産業振興公社から事業費を集め、さら

フィールドミュージアム元所長。水野氏と共に古今伝授の里づくりを推進。や私の思いを受け継いでミュージアムの運営にあたってくれている市職員が、いまの現場を回しています。開園20周年以降のミュージアムの新しいステージは、この次の世代の先生方や職員のおかげです。私は、今もこれからもそれを見守り、今の立場でできる最大の応援を続けたいと思っています。



上) ホテルより望む郡上八幡城

下左) 改修中のホテルのレストランにて 下右) ホテルの一角に造園

古今伝授の里フィールドミュージアム

上) インフォメーションセンター 下左) レストラン「ももちどり」 下中央) 和歌文学館 下右) 建設中の「短歌の里交流館」

水野さんのこれから

藤原..こうやって、フィールドミュージアムを作り、今度は3セクを任せられてここまでやってきて、ホテルの誘致も実行してこられました。水野さんのこれからは何ですか？

水野..大和時代に担当した事業が一つずつ増え現在に至っています。市役所在職中に郡上の15社の第3セクターに関わり、経営改善に取り組み、そして課題であったパーキングエリアの事業用借地権の再契約もできました。平成22年からは奥濃飛白山観光圏に関わり、ホテルもあと3年ぐらいで経営は安定するところまで来ました。その時が来たら後は若い人たちに任せます。今後やりたいことは、郡上市内の3セクの統合です。現有の施設、運営ノウハウ、資金、人材の統合を行いたいと思います。長く市役所にいましたので、良いところも悪いところも見てきましたが、市役所だから僕はできたと思いますよ、ハードも企画も含めて。要は資金の出所がなかったらできません。

藤原..そうですね。

水野..仕事としては遊びになるぐらいの感覚でないと、創造的な仕事は出来ないと思います。私の場合、造園などは自分の表現方法として楽しんでやっています。四季折々変化する自然を私なりに皆さんに見て頂く、お客様に伝えることが楽しいのです。

02

地域文化の つくり手から



「筆の都」のづくり

広島県熊野町は、広島市・呉市・東広島市に隣接し、周囲を山々に囲まれた人口24000人の町です。180年余りの歴史をもつ「筆の都」として知られ、2018年の熊野筆の総生産額は116億円と推計されています。

「筆の都」としてのまちづくりを仲間と共に提案し、拠点施設である「筆の里工房」での事業を20年以上にわたって進めてきた石井節夫さん(筆の里工房館長代理)にお話を伺いました。

石井 節夫さん

(一財)筆の里振興事業団 常務理事



Interview

藤原..フィールドミュージアムも道の駅でも、林があり森がありという感じで、それを通ってくる風がすごくいいですね。

水野..大阪から御夫婦がわざわざ庭を見に来られます。大和の道の駅の庭園を見るために訪れたいと話されたときなどは「ああ思いが伝わった」と思います。日本人の自然観、美意識を呼び起こさせ、感じて頂けるような空間を創ること、これが私の表現方法の原点です。

藤原..日本人の自然観。

水野..自分の中に宿らせ、それを庭園で表現し、旅人に感じて頂く。それが自分のやりがいというか、一級建築士さんも「水野さん、デザインお願いしたい」と頼みに来られます。私は土地を見なかつたらイメージは浮かびませんとお答えしますが、郡上のこの自然をテーマにしながら日本人の自然観を伝えていきたいと思っています。

筆のまち・熊野町

藤原..まずは、筆の里工房の前に、どうして熊野町で筆なのでしょう？

石井..実は、熊野町と筆との最初のつながりは、はっきりしていません。一つには、江戸時代の終わりには、全国どこかの藩もそうですけど、財政的に窮する事態があつて、広島藩が産業を奨励するということがあつたんです。この地域では、江戸の末期に農閑期を利用して、筆や墨を関西方面から仕入れて、それを諸国に売りさばきながら帰村するという人物がいた。他にも、紀州の熊野信仰と所縁があるとも言われており、その起源はあまり良くわかっていないんですけれども、いずれにしても200年以上前です。

こうした、筆墨の行商が契機になって、筆づくりの技術をこの地に根付かせようと、まさに江戸期のまちづくりですね。1830年代、今から180年ほど前になると、今の兵庫県の有馬地方に中学生ぐらいの少年を派遣して、筆づくりを学ばせる。あるいは広島藩から筆の職人を呼んできて、そこで技術を習うというのを一生懸命にやるんです。江戸時代後期というのはそれほど筆の需要は大きくなく、上流階級を除けば、商人や寺子屋で学ぶ人々など少数の人に限定されていたと思うんです。やがて明治になって、教育制度改革により義務教育制度が充実していくと、当時の筆記具は筆ですから、その過程で需要が高まって、筆の生

並木や小径、池、沢が配されたフィールドミュージアムの散策コース



産量が増えていきます。明治から大正、昭和の初期にかけては飛躍的に生産量が伸びました。ところが第2次大戦後の占領下に置かれた時に、GHQの方針で、学校教育で行われていた書道が、正科、つまり義務で必ずやらなければいけない教科から外れて、自由研究になってしまつて、学校で書道を積極的に教えなくなるんです。それまで、学校教育と一緒に発展した町ですから、需要が低迷し壊滅的な影響を受ける。その時にどうしたかというと、書道筆づくりの技術を活かして、絵画筆や化粧筆を作り始めた。それが昭和20年代後半から30年代にかけてですね。筆は次第に戦後から復興していくわけですが、やはり、近年は児童生徒数も減つてますし、中国から安価な製品も入ってきて、価格競争的にはなかなか難しい状況です。平成になってからは、化粧筆の品質が海外で評価されるようになってきます。ハリウッド女優やパリコレで評価されて、逆輸入されて日本で再評価される。特に黒船効果ですね。どうして人口24000人の小さな町でこんなことができるのかと当時注目されました。中小企業庁からもいろんな支援を受け、ジャパンブランドなどもやりましたが、極めつけが平成23年の8月になでしこジャパンが国民栄誉賞を受けた時の記念品に地元メーカーの化粧筆が選ばれたことで化粧筆の認知度が飛躍的に高まったということですね。もともと100億円ぐらいの地場産業で、化粧筆が目される前は書道用の筆が6割

ぐらい、化粧筆が3割、画筆が1割ぐらいの生産割合でしたけど、今は、書道用の筆と化粧筆の立場が入れ替わって6割以上が化粧筆という形になっています。

このように熊野筆については、江戸期の終わりに筆墨の行商が契機になって、技術の導入が進み、明治以降の学校教育によって発展したけれども、第二次世界大戦の時に壊滅的な影響を受けたと、その時に書道用の筆の技術を活かして絵画の筆とか化粧筆を作り始めています。それが平成に入り、30年ほど前から化粧筆の方の認知度が高まって需要も品質も向上し、現在に至るということですね。

藤原..私の息子たちも書道はクラブ活動の人たちしかやってないと言っていました。一応、筆箱みないのは持っていましたが。僕は授業でやりました。今やパソコンの時代になって。でも、毛筆の美しさというか、学校教育で必要ではないかと。

石井..それは日本文化といえますか、筆に限らず、日本人が培ってきた伝統文化や美意識の育成に日常生活や学校現場ではなかなか取組む時間がないということですね。学校で、もつと自由に筆に親しめる授業があれば一番良いです。

藤原..文化的なものがある意味置き去りにされたことが一時あって、今は伝統文化も大事にされることもありますが、一時は合理化ばかりになった時代もありましたね。鉄のミュージアムをつく

筆の里工房のはじまり

藤原..まず、この博物館、筆の里工房を整備するという案が出た時に、どう思われましたか。

石井..もともとは我々がプレゼンをした資料がベースになって、ここをつくろうという話に至ったんですね。内容はともかく、こういう施設をつくるのは重要なことだと思っていました。まさか自分が携わるとは、その当時は思ってなかったですけど(笑)。熊野町にとっては画期的なことなんだろうと。商人の町といえますか、ものを売って成り立ってきた町に、採算が厳しい文化施設はなかなか受け入れ難いところがあつたんですけど、振り返ってみると、やはり重要な役割を果たしていると思います。

藤原..やはり技術の伝承ということと、筆がつくってきた日本の文字文化、それともう一つは、それまであつた文人墨客との交流をもう一度整理して、表に出してみるというのがあつたのでしょうか。

石井..発想の原点がそれですよ。これまでの歴史を整理しよう。それと技術の伝承というのもありましたが、それについては、むしろうちよりも、熊野筆事業協同組合の主要な事業なんです。うちでできることは、どちらかというと、筆の文化的な背景を整理してお伝えすることですね。

藤原..その背景をきちんつくられたことが産業の継

つた時にも、鉄くずを集めて何をするのかと言われた時でしたから。

石井..この施設では、熊野の町の活性化という中で、これまでは180年間続いてきた筆づくりの町だけれども、やはり今後は、筆の持つ文化的な背景、あるいは筆が日本の文字文化に対してどんな貢献をしてきたかということ、我々は大事にしていかなきゃならないと思っています。熊野町は今でも「筆の都」と呼ばれていますし、道具である筆から文化を考える所もないので、うちでやっていこうと取組みを始めたんです。その時に、目から鱗だったのが、吉田村の藤原さんの考え方だったんですね。うちも筆を作ってきたことで、文人墨客との交流も古くからあって、著名な作家の書跡もたくさん残されている。しかし、そのほとんどが今の人たちに理解されていないし、活かされていない。それを集大成して、将来の熊野町の魅力といえますか、地域活性化の柱にしていこうということですね。をつくったんです。平成6年、「ふるさと創生」のちょうど最後の年に当たるんですが、町の予算が当時60数億の時に、ここ全部で、平成4年、5年、6年の3か年で20億以上使ったんですね。もう非難轟轟で政争の道具ですよ。ここがもう関ヶ原の戦場になって。結局、平成6年の9月にオープンしたんですけども、僕はその年の8月にここに来たんですね。ですから建設過程には携わってなくて。総論的なプレゼンばかりで、あまり中核や具体のところは理解できてなかったんです。中に入ってみたら、おもちゃ箱

続だったり品格をつくったりというところに大きく貢献してますよね。

石井..やはりすぐには、結果は出ないかもしれませんが、大切なことだと思えます。

藤原..それでここがつくられて、開館当時から来館者は多かったですよね？

石井..そうでもなかったですね。そんなに人も多くなかったですし、認知度も低かったですし、決して町民の合意のもとに整備したのでもなかったですから。とにかく施設として体裁を整えるために必死でやったということでした。

高木..当初から財団での運営だったのですか？

石井..僕が、元町長に、当時の職を辞めてここに来ないかと誘われたんですね。その時に覚悟を決めて一つだけ条件を出したのが、直営でやらないことだったんです。直営でやると、専門職の育成や人事異動が大変なので、財団をつくって、財団で運営するんだって考えますと答えました。そうしたら、「つくります。私もそう考えました。直営では難しいと思います」と。当初はスタート時点の平成6年から財団をつくる予定だったんですが、紆余曲折があつて半年遅れたんですけども、平成7年の3月30日に、設立の許可を受けて、新年度から財団で運営する

をひっくり返したような状態でしたね。収蔵庫に行ってみれば整理も何もされていない状態でしたから、ずいぶん苦労しました。しかし、当初から描いた方針は変えずに熊野町の地域の活性化のためには必要な施設なんだ、そこで実績を残していかななくてはいけないと、入館者数や利用実績を増やす努力だとか、財源確保に取組んできました。



左) エントランスにて開館25周年記念の企画展の案内 右) 世界一の大筆

ことになりました。

藤原..財団の基金はどのように？

石井..これは町です。熊野町が1億出して、あと100万円ずつを、三重県の鈴鹿市と宮城県雄勝町(現在は石巻市)と鳥取県の佐治村(現在は鳥取市)。「文房四宝」と言いますが、筆、硯、紙の産地です。伝統的工芸品の産地から出資金をもらいましたが、県の方から許可条件として示された基金額は最低1億円で、その殆どが熊野町の財源ですね。今も基本財産に積んでいます。

藤原..財団をつくるときに重要なのは基金と理事の構成ですよ。理事の構成がうまくいかないと活動がうまくいかないのです。

石井..当初から私が事務局長でした。役所や議会からは、財団の理事に町執行部、教育委員、議員、行政協力団体を入れろとかいろいろ言うんですね。絶対だめだと言ったんです。そんなのつくったら..。

藤原..役所と一緒だ(笑)。

石井..なので、評議員の中に入っていたことはやぶさかではないけれども、理事は幅広い視野で筆の文化振興に貢献されていて、事業団の趣旨